

令和5年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立大久保中学校 教諭 赤坂 日和

- 1 派遣期日 令和5年8月6日(日) ～ 8月6日(日)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 十文字中学校・高等学校
所在地 東京都豊島区北大塚 1-10-33
<http://js.jumonji-u.ac.jp/>

3 研修内容

第16回 全国国語教育研究大会

大会主題「改めて『主体的・対話的で深い学び』を問う～成果と課題、そして展望」

(1) 大会開催の意義について

この「全国国語教育研究大会」は国語教育実践改革会議が開催する全国的な規模の研究大会で、国語教育に携わる多様な人々が一同に会し、国語教育の在り方を実践的に研究する会である。大会の第1回は、「ゆとり世代」という表現が世に広まった1998年、学習指導要領が改訂されるという激動の年に行われた。第1回以降は中央審議会答申の内容をもとに実践の具体例を模索するものだった。

そして今年のテーマは「改めて『主体的・対話的で深い学び』を問う～成果と課題、そして展望」となっている。平成29年告示の学習指導要領における授業の実践と課題を改めて明らかにし、今後の国語教育の在り方を模索するという試みであった。

常に自分たちの実践を吟味し、社会の求める学力を育てる授業をするための工夫を続けなければならないという考えのもと、国語教育の改革の方策を明らかにし、その成果を全国の国語教師に役立ててもらいたいと願いをこめてこの大会を開催している。

(2) 講話「学習指導要領の実践の状況と課題～『指導と評価の一体化』の考え方に立った学習評価の改善～」

①評価の種類

教員が日常的に行っている「学習評価」について、「学習指導要領に定める目標に準拠した評価」と「個人内評価」があることを改めて確認した。この「評価」の種類について、保護者や生徒が考える「評価」と我々教員が捉えている「評価」にずれが生じてしまう可能性があると考えた。ずれが生じた場合、明確な説明ができるよう、「評価」する側が、どこまでが「学習指導要領に定める目標に準拠した評価」で、どこからが「個人内評価」なのかを明確にしておく必要があると感じた。

②指導と評価の一体化を図る際のポイント

学習評価を生かした指導をするうえで、「Bと判断する状況」がとても重要になる。例えば、評価規準を3つの要素に分けたとき、そこに優先順位は発生しない。全ての要素が重要であり、全てが身につくことで、単元で育成を目指す資質・能力の実現になる。そのように考えると、3つの要素のうち1つでも達成できていない規準があればCになるということである。達成できていない要素を指導し、おおむねできる状態にしてBとなり、更に質を高められていけばAとなる。このように、全ての要素をもって資質・能力の育成になる、という考え方が大切であると学んだ。

(3) 実践発表

①「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して

詩の鑑賞やメディアリテラシーに関する授業において、共通の単元目標に向かって生徒一人一人が自分の興味のある視点に基づいて学習を進めていた。ワールドカフェなどを通じて意見交流をすることで、協働的な学びも実現することができている。ゴールを共通にすることで、個別最適な学びも実現できていると考えた。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現

詩の鑑賞において、単元で扱う作品とは別のお題で1度レビューを書き、その後実際に教科書の作品のレビューを書いていた。1度目のレビュー作成の際、生徒同士で相互評価をさせることによって、生徒自身で課題を見つけ改善する様子が見られた。これまで言語活動は記録に残す評価として実践していた。

③生徒を主語にした「学びのプラン」

「書くこと」の「考えの形成・記述」の系統に焦点を当て、「学びのプラン」を活用していた。「学びのプラン」では、従来の振り返りカードのように授業ごとに振り返るのではなく、言語活動の前の授業や最後の授業に向けて生徒自身が意識したいことや、どんな活動をしたいか記述するものである。このことにより、生徒は単元のつながりを実感しながら、自分の学びの到達度をこまめに確認することができる。「学びのプラン」の活用を通して自律した学習者を育てることができていると考えた。

(4) 今後の国語授業に期待すること

田中洋一、松野洋人、富山哲也、河野庸介による座談会が行われ、今後の国語授業に求めることとして、①読みの段階を意識させること②答えが載っていない発問をすること③具体的な頑張り方を示すことが挙げられた。生きる力につながる国語力を身に付けるために、生徒自身が必要性を感じるよう、教師が働きかける必要がある。

4 感想

生徒の多くは国語授業において、教員が求めている答えを言おうとしたり周りの答えに合わせたりしてしまう。将来自分の力で考え、解決できるよう育成するためには授業から思考する機会を設ける必要がある。しかし全てを生徒に任せるのではなく、教師が丁寧なアシストをすることが大切だと感じた。